



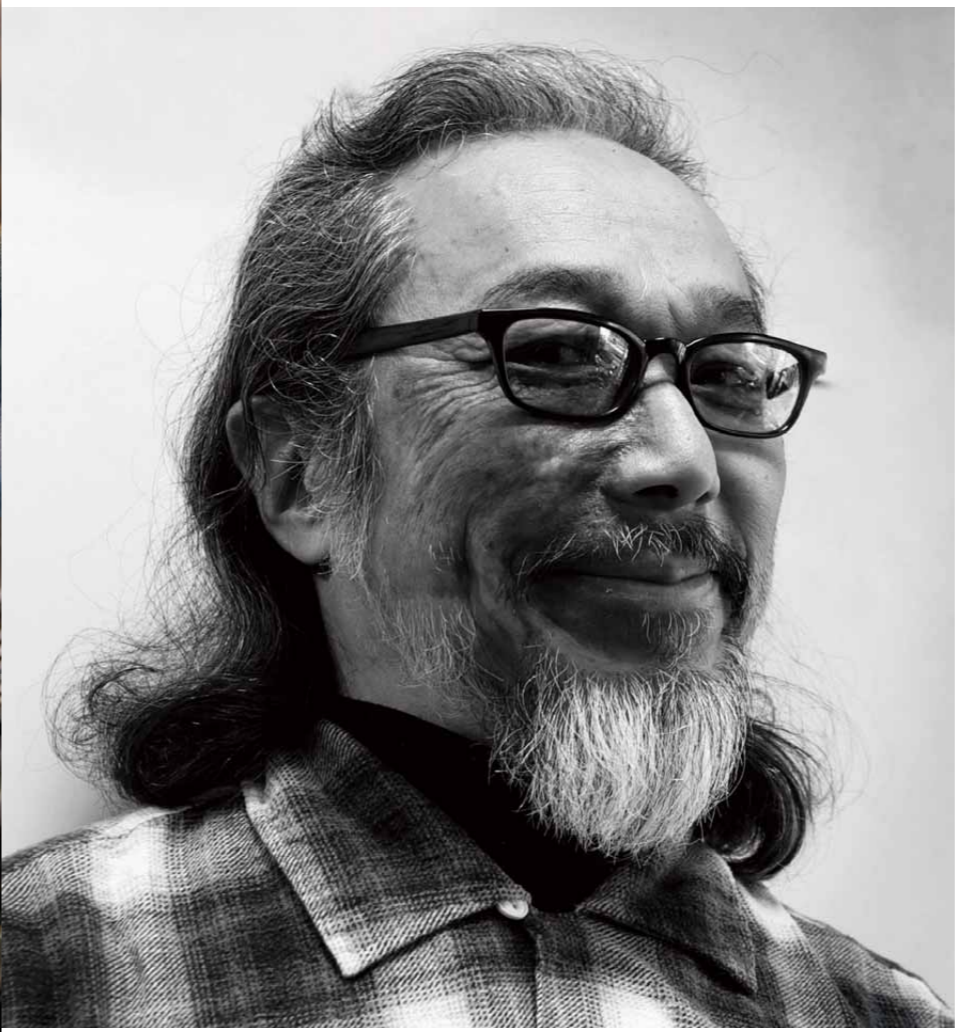
料理人のように手に入れた良質の素材をひとつひとつのパーツから道具に変えていく作業は今日も続く。



20年前コンディションの良いオイルレザーで自らのサドルバッグを制作した。そして走り続けた距離と時間は信じた素材を確信した製品となった。



オーダーメイドの最新作。このサドルバッグはこれから新しいオーナーと一緒に今後何10年も道具として働き続ける。(現在は都合によりサドルバッグのオーダーメイドは受付けておりません)



「俺の40年を旅とサドルバッグというくりで、しかも一言で語れと言うのか!」と荒げて言い放つ男がいた。彼が語りきれないというのは歴史が、ましてやその技術が、といった過去を語る懐古趣味的なことを指しているわけではない。その意味するものは、これまで走り続け仕事を続けてきた日常の積み重ねであり、期限を決めることなどできるはずもないこれからも続くその生きざまを一言などでは語れないということなのだ。年間350日以上バイクに跨がり、自分で製作したサドルバッグを日差しや風雨、振動や排気ガスにさらしながらバイクと共に革という素材と向き合い続けてきた日々。そのすさまじいともいえる姿勢があるからだ。そこに構築されたフォルムや仕事ぶりにBIKER MONの求めるモノとしての存在感を見るのである。バイクの旅に欠くことのできないサドルバッグ。バイクと共に置物ではなく生きているモノとして存在し続けるサドルバッグ。そして静かに旅をサポートし、使い手と共にその時間を重ねながら生き生きしたサドルバッグと呼ばれるライフツールがここにある。

80年代からウオレット、各種ホルダー、サドルバッグとバイカーズアイテムにこだわった製作活動を続けてきたCAP佐藤拓氏を訪ねた。彼は過去を振り返ってその経歴や仕事ぶりを語ることを嫌う。それはモノを作り出す人間としての姿勢を大切にできているからであろう。姿勢というより生々しい生きざまといった方が良いかもしれない。簡単に小さなモノを作るにしても、ひとつひとつ集中する毎日を通して見えてくる。そこで、そのひとつひとつに込められたモノとしての存在感を明かせればと思つのである。17才のガキの頃から40年も共に生きてきた僕としては彼の創り出すひとつひとつの道具に敬意を持って見てきたので、そのモノと人の関わりを語るためにあえてその「経過」を書かせていただく。

高校生の頃から、革とその生み出されたフォルムに佐藤氏は強い興味を示していた。一緒に授業をさぼっては新宿に立ち、駅周辺を歩く人たちの靴を観察するのである。彼は行き交う人たちがそれぞれ履いている靴を正確に分析していた。そのモノがどのジャンルでどんな歴史を持ち、その靴を履く人はどんなタイプの生活を求めているか、さらにどの店の何段目の何足目にあつたものかなどという観察遊びをしていた。気に入ったもので知らないものがあれば銀座まで足を伸ばしてでもその正体を明かした。その後プロダクトデザインの勉強をするために大学へ行ったが、ある日バックパックを背負ってユーラシアからアフリカへの旅に出た。大学という場にフックを出して革の生み出すフォルムの実像を求めて世界に飛び出したのだ。帰国後彼はプロのシューズデザイナーとしての道を進んだ。30代半ばには世界中に名を轟かせた

写真&文：神山 均 取材協力：CAP (TEL：03-5721-8957)

ファッションデザイナーや有名ミュージシャンを相手にするデザイナーとして活躍していた。ところが、これまたある日そんな魅力的な世界に背を向け、革という素材を扱うモノ作りの道を選んだのだ。その当時彼にとって靴には右と左という一对の宿命があることも悩みの種だったが、世の中が生産効率と利益追求ばかりにますます精を出し、そこまで自分を支えてくれた靴職人たちが工場が追いやられ、自分の求めるモノ作りとまったく違う方向に走ろうとする社会に我慢ができなかったようだ。ここでもまたフックを正々堂々と出したのだ。そして、今でもフックを出している続けている。その一針一針には彼の数10年のモノ作りへの想いが刺し込まれているのである。しかしその一針は芸術家の吐き出す怨念のようなものではなく、マンネリ化した職場でこなす投げやりなものでない。モノと人との関係を冷静に見抜き、革という素材を知り尽くしたただの古典的な職人の差し込みなのだ。これまでいくつも世に送り出してきたモノのひとつひとつに個性差がないことにその証を見る。ことができる。今日もまた愛車Wに跨がり街中の不条理にフックを出して走りまわりながら、革と向い合えば何事もなかったように静かにモノ作りに勤しんでいる。佐藤氏の創り出したモノたちは「俺の40年を旅とサドルバッグというくりで、しかも一言で語れというのか」という言葉に刺し込まれた自由への刺青を背負っているのである。「これらのバッグは、俺が今後バイクに乗り続ける時間より長く使えるように作つてある。そして今までバイクで走ってきた分が、中に裏打ちしてある。」